

The Cambridge Gazette: Lessons Learned

For Young Samurais in the Age of Globalization and the Internet

『ケンブリッジ・ガゼット: Lessons Learned』
第1号 (2006年6月)

ハーバード大学
ケネディ・スクール
シニア・フェロー 栗原 潤

グローバル時代における知的武者修行を目指す若人に贈る栗原航海(後悔)日誌@Harvard

今月号の目次

1. A New *Cambridge Gazette*
2. 栗原後悔日誌@Harvard
3. 微笑みとジョークを忘れずに
知的戦いの盾: 微笑み
知的戦いの矛: ジョーク
4. 編集後記

1. A New *Cambridge Gazette* 創刊: 若人に贈る栗原後悔日誌

「グローバル時代における知的武者修行」を目指す若い方々を対象として、このニューズレターを慶應義塾大学出版会のウェブサイトから発行することになりました。このことを、若い読者の方々に謹んでご報告すると同時に、慶應義塾大学出版会のご厚意に深く御礼申し上げます。

私達は、現在、想像を遥かに超えた勢いで進展するグローバリゼーションのなかで生活しています。情報通信技術と運輸交通手段の発達によって、グローバリゼーション自体は、好むと好まざるとにかかわらず、また、良かれ悪しかれ進展している現象です。そのために現在の経済社会環境下では、物理的にも心理的にも「鎖国状態」を維持する領域は次第に失われつつあります。このような理解に基づき、将来、ビジネスに、或いは研究において、世界に飛び出して積極的に活動をしようという「志」を懐いた若い方々に向け、私の苦い失敗や驚きの経験から得た教訓をお伝えするというのが小誌の目的です。勿論、才能も時間も制約された私というたった一個人の経験であるため、小誌に記した教訓すべてが、「グローバル時代における知的武者修行」に

役立つとは期待できません。それどころか皆様から失笑と軽蔑を頂くかも知れないと少し心配しています。高い「志」を懐き、才能と可能性を秘めた人々が、こうした小誌の限界を承知しつつも、私が綴る「航海日誌」ならぬ「後悔日誌」から役に立つ教訓を少しでも汲み取って頂けるなら、小誌発行の目的が十分達成されたと喜ぶことができます。

2. 栗原後悔日誌@Harvard

2003年の5月以来、私はハーバード大学のケネディ行政大学院シニア・フェローとして、日本のグローバル化や日本企業のグローバル展開に関する研究活動を実施してきました。過去3年間、周囲の人々のご好意によって、私は楽しい研究生活を過ごすことができました。とはいえ、どの世界でも同じでしょうが、決して完全に満足できる3年間であった訳ではありません。私の場合、大小様々な障害に突き当たり、同時に、自分自身の能力の限界を思い知らされた毎日でもありました。

ご存知の方も多いと思いますが、ハーバード大学は、イェール、プリンストン、シカゴ、スタンフォード等と並んで米国が誇る高等教育・研究機関の一つです。ここでは、一流の研究者が学内で研究すると同時に、政治家、企業家、ジャーナリスト、そしてNPO等の社会活動家、すなわち、一流のプラクティショナーが実践的知識を求めてハーバード大学を訪れ、本学の研究者と活発な意見交換を毎日に行っています。また、ハーバード大学に集まる研究者は学内だけにとどまりません。マサチューセッツ工科大学(MIT)、ポスト

ン大学、タフツ大学等、近傍に存在する大学の研究者、更には世界中の一流の研究者が知的刺激を求めてハーバード大学を訪れています。勿論、日本からも優れた研究者が数多く訪れています。私も本校に来て初めて親しく意見交換をさせて頂いた方々、例えば、東京大学の林良造教授や高原明生教授、三井物産戦略研究所の鈴木通彦研究主幹、そして慶應義塾大学の野村浩二助教授等から多くを学び、以来、引き続いてご指導を頂いております。

このように一流の研究者と一流のプラクティショナーが集まるハーバード大学ではありますが、そうした「ヒト」の集積自体、また優れた「ヒト」が携えてきた「情報」の集積自体は私達にほとんど意味を持たない現象です。何故なら質の高い情報交換と知的創造の場であるハーバード大学では、私達が積極的に働きかけない限り、ほとんど得るものが無いからです。すなわち、信頼関係を構築するに十分可能な長い期間にわたり、継続的にしかも直接的に実施される双方向の知的対話がなされない限り、私達にとってハーバード大学は美しいキャンパスを持つ一つの大学でしかありません。実際、創立以来370年という米国最古の歴史を誇るハーバード大学には、多くの観光客が訪れます。彼等は、18世紀にまで遡ることができる建造物をはじめ、モネやピカソの作品を収蔵する美術館、精巧な動植物の標本や天然鉱物が展示されている博物館等の写真を撮っています。そして、前述した知的対話を恒常的に行わない限り、私達もカメラを片手にした観光客とほとんど変わらない人間だと、ハーバード大学の人々に思われても仕方ありません。

ハーバード大学に限らず世界中のどこにおいても、才能有る「ヒト」との親密な対話を楽しむ際には、或る一定の「約束事」ないし「ルール」が存在します。そうした「約束事」を厳密な形で学んだ訳ではありませんが、質が高く、直接的・双方向・継続的な情報交換の機会に溢れているここハーバード大学で、

私は実感したような気が致します。すなわち、高い「志」と優れた才能を秘めた「ヒト」と質の高い情報交換をするには、次の5つの要件が満たされなくてはなりません。その5つとは、(1)一流の専門知識、(2)幅広い一般教養、(3)語学力、(4)マナーと交際術、(5)多角的・重層的な協力・相互補助の精神です。

一般論として、継続性を前提とする知的対話は、旅先で知り合った感じの良い人々との他愛の無い短い会話ではありません。ですから、(1)一流の専門知識、(2)個人的な親密度を増すのに不可欠な幅広い一般教養が当然不可欠であることはすぐに納得して頂けると思います。加えて、社会科学の場合、情報交換の媒体である(3)語学力(言語表現力、傾聴能力)は重要です。よほど飛びぬけて独創的な内容でない限り、言葉を抜きにして多くの人々の前で自らの意見を披露することは現実的に不可能です。また、「鋭いヒトだ」と相手に認識されない限り、相手も私達に情報を(言葉で)伝達する気にはならないでしょう。しかも、ハーバード大学は米国の大学ですので、現地語であり、同時に事実上の国際的共通語(*the lingua franca*)でもある米語を巧みに操らなければ、私達の専門知識や一般教養が「ホンモノ」かどうかについて確認の方法がありません。更には、(4)互いにリラックスしながら意見交換するための知的マナーと国際的交際術、そして誰もがすべてのことを完璧にできる訳がないので、(5)多角的・重層的な協力・相互補助の精神、以上の要件を私はハーバード大学で毎日のように感じております。

理想を言えば、これらに関して、私の「手柄話」を語りたい気持ちですが、悲しいかな、運命はそれに相応しい能力を私に授けては下さりませんでした。従って、私自身、上記の要件を満たした形で知的会話を行ったことは一度も無いどころか、顔から火が出るほどの恥ずかしい思いをしたことは無数にあります。こうした苦い経験をご紹介することによって、有能な若い方々に将来役立つ何かを少しでも

見出してもらえないかも知れないとの期待を懐きつつ、私の「後悔日誌@Harvard」を読者の方々にお届けしたいと思っています。私の「後悔日誌@Harvard」に参考になる部分がもし有るとしたなら、それはハーバード大学のシニア・フェローとして4年目を迎え、匍匐(ほふく)前進・七転八倒の努力をしている一日本人の苦い経験と、日本に居ては気付かない覇権国米国で展開される議論だと考えております。こうした理由から有能な若人に「他山の石」としての「教訓」を伝えることは、私の使命であり、それが天命ではないかとさえ感じております。実践的知識を重視する若き後輩諸氏が私の失敗談に基づく「教訓」を知り、「へえ、そんな失敗をしてもハーバード大学で生き残っている日本人もいるんだ。ワタシ或いはボクならもっと上手に生き抜ける」と明るく自信と希望を持って頂きたいと思えます。

3. 微笑みとジョークを忘れずに

小誌では、毎回一つのテーマに基づいて書いていこうと思います。創刊号のテーマは「微笑みとジョークを忘れずに」です。まず結論を簡単に述べると以下の通りです。グローバルに情報交換を行うと往々にして想像を絶するような天才的な人々に出会う機会に恵まれ、そうした人々と知的な対話を行うことにより、知的、経済的、社会的に私達が豊かになれる可能性が発生する。ただそうした才能ある人々が私達と情報交換をしてくれるかどうかは、私達の実力と態度次第である。そしてその実力はそう簡単に身につくものではない。では素晴らしい才能を持った人々とは、私達の実力が向上するまで知的対話を行う機会は一切出来ないのかというと、実はそうではない。私達が実力を向上させ、知的対話を行いたいという熱意ある態度を、才能ある人々に伝えることさえ出来れば情報交換が可能となる。その際、知的対話を行うことで、相手側にも素晴らしい結果が生じるであろうという期待を抱かせることさえ出来れば良い。そし

て実は、その時の最大の武器が微笑みとジョークである。従って、如何なる時にも微笑みとジョークを忘れてはならない。これが今月の話題です。

繰り返しますが、グローバル時代における知的武者修行で鍛えるのは、前述した5つの要件です。そして、その要件は短期間で満たされるものではありません。それどころか、毎日の努力の積み重ねが無くては決して満たされないものばかりです。この努力の必要性は強調し過ぎることはありません。これらは私のような年齢に達した人にとっても等しく重要な要件です。今年4月、塚本弘ジェトロ(日本貿易振興機構)副理事長がボストンを訪れ、ハーバード大学とMITで、ケンブリッジ在住の専門家達と親密な知的対話の機会を作って下さいました。本学の中国専門家のアンソニー・セイチ教授や国際貿易の専門家であるロバート・ローレンス教授から、また、MITインダストリアル・パフォーマンス・センター所長のリチャード・レスター教授からも鋭く厳しい質問が塚本副理事長に向けられましたが、それらを軽妙に処される同副理事長のお姿を拝見し、尊敬の念を強めた次第です。6月初旬、東京で再会した折、同副理事長は私に向って「栗原さん、(海外で)講演した後、いつも反省しているのですよ。ここはこう説明しておけば良かった。あそこはこう表現した方が良かった、とね」と仰いました。優れた人は常に向上心を懐き、陰に日向に努力をされていると感心した次第です。

知的対話は、質の高い「情報」というボールを交換するキャッチボールのようなものです。投げ手は受け手の実力を観察しながらボールという情報を投げてきます。投げるボールが早すぎても、また受け手の守備範囲に投げるのでなければ、キャッチボールは成立しません。つまり、情報交換の質は投げ手と受け手の実力次第で大きく違ってくる訳です。

一流の研究者や一流のプラクティショナ

一は自らの分野で、また自身に適したスタイルで、前述した5つの要件を満たす努力に余念がありません。自己の能力の限界に毎日挑んでいる人々は、崇高な学問や深遠な真実の前で、自らの能力と業績が学問・真理全体に比すればほんの僅かの部分であることを自覚しています。それ故に彼等は常に謙虚な気持ちで研究を行っています。この意味で日本の諺「実る程に頭を垂れる稲穂かな」にある如く、ハーバード大学の研究者は例外なく謙虚で丁寧な対応をして下さる人々です。その一方で、彼等は寸暇を惜しんで努力をするが故に、よほど内容が高くない限り、気難しい面持ちでたどたどしく話す相手と悠長に情報交換しようとする意欲はさらさら持っていないことも銘記すべきです。

このように当たり前の話ではありますが、情報交換に極めて高い質を求める際、キャッチボールと同じで、相手が私達に真剣勝負の素晴らしいボールを投げてもらうよう、その気にさせる必要があります。私達の能力が低ければ、相手は私達の知らない間に即座にそれを察知して、受取り易い簡単なボールを返して来るか、或いはボールを投げ返して来ないこととなります。我々にとっては受け取り易いボールが返って来たと喜ぶ一方、投げ返してこない、「ナンと無礼な態度なんだ!」とムツとしてしまいがちです。しかし、このこと自体、国際的な知識社会における落とし穴（「井の中の蛙」的な誤った認識）が潜んでいるのです。

孔子の『論語』「雍也第六」に、「子曰わく、中人(ちゅうじん)以上には、以て上(かみ)を語(つ)ぐべきなり。中人以下には、以て上を語ぐべからざるなり」という有名な言葉があります。また、フランスのモラリストであるラ・ロシュフコーの『箴言(*Les Maximes/Réflexions ou sentences et maximes morales*)』に、「ちゃんと分かる人にとっては、訳の分からない人達に分からせようと努力するよりも彼等との議論に負けておくほうが骨が折れない(Un esprit

droit a moins de peine de se soumettre aux esprits de travers que de les conduire.)」というこれまた有名な言葉があります。すなわち、東西の優れた先人達は、「相手の能力に従って語りかけよ。相手の能力が低ければ、あまり無理はするな」と教えています。従って、私自身は、ハーバード大学の研究者が私達にとって理解可能だが予想以上に簡単な説明をしたり、返事をしなかったならば、それは、「失礼ながら、真剣勝負での知的対話は当分の間無理のような気がします」という相手側からのシグナルとして理解しています。尚、ここで「平易な議論」と「簡単(単純)な議論」との微妙な違いが、実は大きな差を生みますが、これについてはまた別の機会に論じたいと思います。

さて、私の場合、ハーバード大学の研究者との知的対話は、1980年代後半にまで遡ることが出来ます。1980年代から1990年代前半までは、日本が世界の中で輝いていた時代でした。従って、本学やMITの研究者は、知的好奇心から心優しい態度で、また内容を噛み砕いて私のような人間にも理解できる平易な形で情報交換をして下さいました。しかし、1990年代後半からは、日本のバブル崩壊と中国の台頭により状況は一変します。バブル崩壊前の日本のように止まる様相を見せない中国。今の中国の方々を見ておきますと、思わず20年前の日本を思い出してしまいます。一方、日本の方はというと、言葉足らずな説明をしたり、一部の日本人に至っては、開き直った態度もしくは説明責任から逃げ回る態度に終始しました。その是非と善悪は別として、そうした印象を、米国だけでなく欧州や東南アジアの人々に植え付けてしまった感が致します。かくして日本は海外からの厳しい目に曝されるようになったのです。こうしたなか、気が合う海外の友人から日本経済に関して集中砲火の如き質問攻めに中断なく遭遇したが故に、私の悲惨なレベルであった実力は少しずつ向上し、未だ完全ではありませんが、心優しい海外の友人と自然な形で情報交換をすることが出来るようになった次第です。

知的戦いの盾: 微笑み

1990年代、特に後半に入ってから、海外の冷たい視線をかいくぐり、質が高く有意義な情報交換を、それも継続的に如何に実施するかが私自身の最大の課題となりました。「お手並み拝見」という冷ややかな態度を採る本学の研究者を前にして私は如何なる実力と態度で臨むべきか。限られた能力しか持たない私は、まるで徒手空拳で熊や虎と戦うような気持ちでしたが状況が許しません。このようにグローバルな知識社会は本当に恐ろしい世界です。正しく冷酷な知的戦いと言って良いでしょう。ではこの知的戦いのなかで何が盾で、何が矛となるのでしょうか。勿論、盾と矛の中心部分は前述の5つの要件です。しかし、盾の外面と、矛の尖端は何かと申しますと、私は盾の外面が微笑みで、矛の尖端はジョークであると考えております。

塚本副理事長をケンブリッジに迎えた前述の会合では、ローレンス教授が日本の通商政策に関して大変厳しい質問をなされました。同副理事長は、「ローレンス教授からは、1980年代から大変手厳しい御意見を頂くのでこちらからワクワクしてきます」と仰りつつ微笑んで同教授の質問に的確に答えられました。数日後、ローレンス教授と廊下でばったり出会うと、「ジュン、この前の会合は本当に参考になったよ」と微笑みながら語りかけて下さいました。この意味で、塚本副理事長と私は、次のような日本人同胞に対して厳しい態度で臨んでいます。すなわち、グローバル時代の到来と叫びながらも、原稿を棒読みし、海外の聴衆に対して全く視線を向けず、苦虫を噛み潰したような表情で講演する日本人。彼等こそが、質の高い情報発信に期待がかかる日本で、対外イメージを悪くさせている、と。

こうした理由から若い読者の皆様には、日頃から微笑みを絶やさぬよう心がけることをお勧めします。というのは土壇場になって微笑むのは難しいということを経験的に感じて

いるからです。話がチョッと逸れますが、スポーツにしる、芸術にしる、そして学問にしる、評論することと実際に行うこととは全く別であることを十分認識する必要があります。6月現在、ドイツでサッカーのワールドカップが、そして英国ではテニスのウィンブルドン選手権が開催されています。お茶の間のテレビで観戦する私達は各選手や各チームの犯したミスを躊躇することもなく厳しく批判する気持ちに駆られます。しかし、テニスであれ、サッカーであれ、実際にそのボールを手にしたことがある方なら、傍観者による評論と当事者による実践とは完全に異なることを容易に理解できると思います。従って、頭の中で「海外では微笑みが知的戦いの盾」と理解していたとしても、日頃から心がけないで急に実践に移せば、「こわばった微笑み(?)」という摩訶不思議な微笑みとなるでしょう。そうなれば、ラフカディオ・ハーンが『アトランテック・マンスリー』誌1893年5月号に掲載した小論("The Japanese Smile")のような考察が再び出てくるかも知れません。

微笑みと言え、私はフランスの哲学者であるアランの『幸福論(Propos sur le bonheur)』を思い出します。学生時代に邦訳本を読み、社会人になった途端に、アマゾン・ドット・コムの影響からか今は消えてしまった銀座のイエナ書房に原書を買に行きました。その時は値段の高さに驚きましたが、その御蔭か大事に思い、繰り返し読んだことを今も懐かしく思い出します。私はアランを通じて、「楽しませる(«faire plaisir»)」という「生きるワザ(«art de vivre»)」を教えてもらった御蔭で、日頃から微笑むことの重要性を学びました。私の微笑みは、名画『モナリザ』や永遠のアイドルであるオードリー・ヘップバーン、そしてウィンブルドンで無敵を誇るロジャー・フェデラーの微笑みに比べれば明らかに非力です。それでもハーバード大学をはじめとして海外の知的戦いにおいて、冷たい視線と共に飛んで来る厳しい質問に対して、微笑みを盾とした回答は好意的に受け止められました。

このようにして、知的な意味で窮地に陥った私は微笑みによって幾度となく救われた経験を持っています。皆様も是非日頃から微笑むことを心がけてみてはいかがでしょうか。

知的戦いの矛: ジョーク

知的戦いにおける防御(盾)の外側が微笑みであるとすれば、攻撃(矛)の先端はジョークです。これに関しては、ユーモアのセンスの重要性として、日本を代表するジャーナリストの一人である松山幸雄氏が、『日本診断』や『国際対話の時代』で既に指摘されております。10年以上も前ですが、私自身、ハーバード大学における松山氏の講演を聴いた記憶があります。その時、冒頭、日本の年功序列制度を揶揄したジョークで聴衆を魅了された松山氏に感心したのを今でも覚えております。この「矛先にジョークを」という欧米の習慣は、アジア諸国にも浸透し始めております。これは、アジア諸国のエリートが欧米での留学経験のなかから得た知恵かも知れません。

一方、一般論として日本人のスピーチは評判が芳しくありません(慶應義塾大学出版会ウェブサイト掲載の *The Cambridge Gazette* の2006年3月号にも書きました)。その理由の一つとして私はジョークの役割に対する認識の差を感じています。ジョークは真剣勝負で情報交換する時の欧米流の「名乗りを上げる行為」のようなものと私は考えております。戦国時代の武士は、「やーやー、我こそは…」と名乗りを上げて戦を始めました。欧米では、「さあ、真剣勝負だ」と互いが緊張した時、過度の緊張をほぐすためにも、また相手に敬意を表しつつ警告を与えるためにも、知的に鋭いジョークを飛ばして情報交換を行います。すなわち、「ジョークの切れ味同様、私達は真剣ですが、どうぞお手柔らかに」という気持ちを表す訳です。情報交換の際、このように考えている欧米人に対し、日本人同士では大切な「口上」である前置き、換言すれば伝統と形式に基づく曖昧さを含んだ前置きの言葉

を日本人が述べると、外国人には「この日本人は問題をはぐらかすために故意に分かりきった抽象的な空文虚字を並べているのだろうか」と疑心暗鬼になりかねません。

内外で情報交換の方法と場が異なるからと言って、私は日本人の分析能力が劣っているとは思いません。ただ、相手が真剣勝負で臨んでくる質の高い情報交換の場で、欧米を中心とする海外と日本とでは、間合いの採り方と「真の情報交換の場」自体が異なっているが故に、海外の人々に不快感と不信感を抱かせる結果になっていると考えています(ジョークは日本では「悪ふざけ」と受取られ、そして正式な会議の外が「真の情報交換の場」というのが一般的だと思います)。冒頭で述べた通り、グローバル化が進展するなか、日本の方式だけに固執している訳には行きません。正しく巧みに「両刀使い」が出来る若人の出現を心から望んでおります。

とはいえ最近ではジョークの上手な日本人が少しずつ増えていることを実感し、喜ぶと共に、生来楽観主義の私は益々楽観的になっております。昨年秋にボストンに着任された鈴木庸一日本国総領事は、聴き手の驚きと笑いを引き出す意外性に満ちたジョークをスピーチの中に巧みに入れるという素晴らしいセンスをお持ちの外交官です。5月中旬、関西電力から出向されている日本人フェローの垣口裕則氏と私との2人で、我が研究センター(Center for Business and Government (CBG))恒例の寿司パーティを開催しました。その時も同総領事はご多忙中にもかかわらず参加して下さいました。そして、米中韓の研究者と気さくに意見交換をされていました。パーティ終了後、米中韓の友人からは喜びと驚き、そして尊敬の念を同総領事に対して懐いたとの嬉しい電子メールを数多く頂いて、私自身鼻高々になったことを皆様にご報告します。

しかし、私は未だ満足していません。生来の楽天主義者とはいえ、物事に対して「悲観

的なほど慎重に準備し、楽観的に行動する」という行動原理を重視する(cautious optimist)の私は、より多くの若い方々に国際的な情報交換の場で真剣勝負をして頂きたいと願ってやみません。その理由は、冒頭に書いた通り、私達は好むと好まざるとにかかわらずグローバル化という大波に襲われているからです。人口減少期に入り急速に高齢化する日本は、東アジアにおける隣国中国の台頭と世界全体を包み込んだ技術進歩によるグローバル化の進展という課題を突きつけられています。こうしたなか、高い「志」と才能に溢れた若い人々の存在意義と活躍の場は増大する一方だと考えております。

5月4～6日、ハーバード大学でアジアの指導的な人々が集い、中長期の展望に関してオフレコで自由闊達に議論しようとする会合(Asia Vision 21 (AV21))が開かれました。今回、日本側の参加者は前述の5つの要件を満たした尊敬すべき方々、すなわち本校出身の林芳正参議院議員をはじめ伊藤隆敏東京大学教授、日本銀行の堀井昭成理事、日本エネルギー経済研究所の十市勉理事、そして本学出身の秋元諭宏米国三菱商事ワシントン事務所長と私の合計6人でした。伊藤先生は幅広い分野にわたって示唆的なお話をされましたし、林先生はジョン・レノンの「イマジジン」の歌詞を挿入した洒落たスピーチで多くの参加者の顔に微笑みを呼び起こしておられました。グローバル化が進展するなかでは、現状に満足することなく、より多数の日本人がAV21のような国際会議、特に、海外で主催される会議で活躍されることが期待されています。海外での国際会議における日本の対外発信こそが、日本の情報受信能力を向上させ、動きの激しい国際情勢とそうしたなかでの日本の国益の正確な定義・認識が可能となります(日本が主催する同時通訳付きの国際会議は様々な点で問題があります。この点については別の機会に論じたいと思います)。AV21は、現在本学アジア・センター所長を兼任するセイチ教授をはじめ、エズラ・ヴォーゲル

教授、ドワイト・パーキンス教授と事務局長役のジョン・ミルズ氏が中心となって企画・運営されています。今回もミルズ氏から、自由闊達な議論ができる日本人として誰が適切かと相談を受けて頭を抱えました。AV21の当日、伊藤先生に向かい、「先生、より多くの才能ある日本人が、このような場で堂々と発言しないとイケませんよね」と申し上げたところ、伊藤先生は「ボクもそう思っているのですが…」と仰られ、先生と私とこの点に関しては同意見だと実感し、また喜んだ次第です。こうして今、私は真剣勝負で国際的な情報交換ができる「ヒト」、すなわち、世界に通用する「国際派」養成の必要性を改めて痛切に感じています。同時に、私は最近、ハーバード大学やMIT、更には米国西海岸のカリフォルニア大学バークレー校の知人からも米国人と同じ間合い(呼吸)で情報交換できる日本人を紹介して欲しいと頼まれることが多くなってきました。このように、質の高い対外発信が出来る日本人の希少性を私は日々実感せざるを得ません。余談ですが、AV21の際に大いに笑ったジョークを紹介します。会合では、アジアにおける日中印3カ国の動向が議論されました。そうしたなか、ある外国人が「国際会議で大変難しいことはインド人にスピーチを終らせることと、日本人にスピーチを始めさせることだ」と言いました。私は思わず吹き出すと共に、日本の対外発信の重要性を改めて痛感させられました。

知的戦いの矛であるジョークに関して、私が彼我の違いを感じた一連の外交関係史を簡単に紹介させて頂きたいと思います。1930年、ソ連の指導者スターリンはマクシム・トリヴィノフを外相に任命しました。同外相は当時のソ連が課題としていた①対米国交回復を1933年に、また②国際連盟加盟を1934年に実現した偉大な外交官です。1933年、就任直後のルーズヴェルト大統領は、日本でも映画ファンなら知っているマルクス兄弟(ドイツ領アルザス地方からのユダヤ系移民が結成した喜劇グループ)の一人、ハーポ・マルクスを

親善大使としてソ連に派遣します。トリヴィノフ外相はハーポと個人的な友好関係を築き、二人で演芸の舞台に立つまでになりました。この米ソ両国間の友好関係を背景に、ソ連の国際連盟加盟が翌1934年9月に実現したと理解されています。私は今、トリヴィノフ=マルクス・コンビがどのようなギャグを連発していたのかをハーバード大学の図書館で調べようとしています。時間的制約から先延ばしになっているのが残念です。

その頃(1933年2月)、ジュネーヴの国際連盟で日本の首席全権たる松岡洋右が「連盟よさらば。わが代表堂々と退場す」という新聞の見出しで有名な議場退場を行い、翌月、日本は連盟を脱退します。複数の資料を読み、また松岡全権の有名な演説も聞いてみましたが、松岡氏の対米観も、英語が上手という松岡氏の評判も素人ながらどうしても首を傾げざるを得ません。そうしていたところ、尊敬する岡崎久彦大使の著作『重光・東郷とその時代』の中に的確に問題点を指摘する箇所を発見しました。すなわち、「第二次近衛内閣の外交は、終始松岡洋右外相に引っかき回され、引きずられたままだったとって過言ではない。それがもたらした結果は、大日本帝国の命運を左右するほど重大なものであった。しかし、この松岡外交の過程をくわしく記述する価値があるかどうかは疑わしい。なぜかといえば、松岡の行動には、歴史の必然性とは必ずしも関係のない、松岡の個人的な動機や習癖からくるものがあまりにも多いからである。それも深い思想や哲学からくるものではなく、自分の沽券にこだわり、俺のいうことは間違ったことはないとか、万事俺に任せるとかという個人的習癖であり、理論があるとしても、長期的な戦略ではなく、強く押せば向こうは引っ込むというような低次元の戦術的計算であった。そしてその意見を押し通す手段は、相手に口を開く暇を与えず喋りまくり、相手を辟易させるということであった」と。議場退場時の発言は松岡氏自身も失敗だと思ったそうですが、清沢冽等の優れた少数

のジャーナリストを除き、国際情勢を冷静かつ客観的に観ることが出来なかったマスコミと一般民衆が情緒的な判断に流されていったことは皆の知る所であります。折角9年間もの米国生活を持ちながら、松岡氏はどうしてユーモアのセンスと知的なジョークを体得しなかったのか。私自身不思議でなりません。

誤解を招かないために付言しますと、私は日本人がジョークを理解しない民族であるとは思っていません。それどころか、日本民族は、落語をはじめ、健全なユーモアの精神をもっている民族であると考えています。6月初旬に一時帰国した際、三菱金曜会事務局長代理時代から長年可愛がって頂いている亜洲広告社の守恭助氏から『タイム』誌創刊号(1923年3月3日号)のコピーを頂きました。そこには米国に赴任する埴原正直大使の紹介があり、同大使のユーモアのセンスを称えています(余談ですが、同大使の米国での活動に関しては皆様で調べられると興味深いと思います)。以前にも触れましたが、愛読書の一つ『平家物語』の「卷十一：先帝身投」には、壇ノ浦の戦いで平家の知将新中納言知盛の最期の様子が描かれています。安徳天皇の御舟で泣き叫ぶ女房達に向かって知盛が語る「たはぶれ(戯れ)」を何度読んでも私は心を動かされ、命を失う直前でも知盛のように悠然とジョークを言いたいと自らを励ましております(*The Gazette* の2004年2月号に記しました)。

以上、知的対話における盾の外面と矛の尖端が微笑みとジョークであることは理解して頂けたと思います。微笑みとジョーク、そして燃え上がる向上心さえあれば、相手も真剣勝負の情報交換をして下さることでしょう。しかし、盾と矛の中身は先に挙げた5つの要件であることを銘記して下さい。たとえ鋭いジョークで知的対話を始めても、知的水準が高くなければ、瞬く間に知的バックグラウンドは金メッキ製だと見抜かれてしまいます。従って矛先だけが鋭利であっても、矛全体が鋼鉄で出来ていなければ知的武器としては役

立ちません。私が師と仰ぐ MIT のスザンヌ・バーガー教授は、卓越した知性と共に誰をも魅了する微笑みで多くの人々から尊敬と好感をもって迎えられている大学者です。この意味で私はバーガー教授と二人で議論する機会に数多く恵まれた幸せ者であります。しかし、私がいち加減な返答をすると、同教授の顔から魅力的な微笑みが消えて横を向かれ、いつも窓の外を眺めながら「ジュン、私は何か誤解したのかしら?」と仰います。私は「いえ、先生。私の理解とご説明が矛盾だらけで不十分だったと思います。私の理解していることをもう一度整理して申し上げますと…」と話しつつ、同教授の顔に微笑みが戻り、こちらに顔を向けて下さることをまだかまだかと待つ時の辛さは言葉では表現できません。しかし、こうした厳しさがあるからこそ、バーガー教授との間で知的緊張感のある関係を持続していけるのだと喜んでおります。

4. 編集後記

「栗原後悔日誌@Harvard(*The Cambridge Gazette: Lessons Learned*)」の創刊号の本文は以上です。冒頭で述べた通り、私の体験談がすべて役立つとは思っていません。が、たとえ一部分でも興味を持てる箇所があるとしたら、この小誌の存在意義があると思っています。さて、日誌・日記と言えば、紀貫之の『土佐日記』や石川啄木の『ローマ字日記』等に加えて、ドイツの大数学者ガウスの『数学日記(*Mathematisches Tagebuch*)』を思い浮かべます。この『日記』はガウスが 18 歳の時(1796 年 3 月)から 37 歳の時(1814 年 7 月)まで書かれたのですがページ数は僅か 19 ページです。しかし、その中には 146 の研究に関するアイデアが詰まっており、ガウスのモットー「寡作なれど熟したり(*pauca sed matura/Weniges, aber Reifes*)」を正しく具現した日記で後世の研究者にとって大いに参考になったことでしょう。それに比べれば、私の後悔日誌は何と貧相な日誌であることかと自ら恥ずかしくな

ります。しかし、有能な若人に「他山の石」としての「教訓」を伝えられたらと願いつつ、毎月記すことにします(脱線で恐縮ですが、私はガウスがノルウェーの若き数学者アーベルの代数における歴史的な証明を無視したことを大変残念に思っている人間の一人です。たとえ大天才ガウスでも大きな間違いをしようとすると、改めて多角的・重層的な協力・相互補助の精神の重要性を感じます)。

実は私自身、重々しい教訓やお説教を嫌う天邪鬼です。それ故に、変な表現になって恐縮ですが、「教訓臭くない教訓」を小誌を通じて述べてゆきたいと思っています。と申しませぬのも、一部の先輩諸氏及び同僚が頻りに用いる「いまどきの若い連中は…」から始まる「教訓」を私自身が最も怖れているからです。逆に、先人のなかには何の努力もしてこなかった人さえが存在していることも動かし難い事実です。まさにセネカが述べた言葉「高い年齢に達した老人が、長い間生きてきたことを証明する証拠として、年の数以外には何も持っていない例がよくある(*saepe grandis natu senex nullum aliud habet argumentum, quo se probet diu vixisse, praeter aetatem./Often a man who is very old in years has no evidence to prove that he has lived a long time other than his age.*)」が指し示している人は少なくありません。かく言う私自身も油断をすればセネカが批判したような年長者になる危険性を十分はらんでいます。従って、若い方々を応援する意味から、また、非力で怠惰な自らを叱咤激励する意味からも、「栗原後悔日誌@Harvard」を綴ってゆきたいと思っています。

以上

編集責任者	
栗原 潤	Jun KURIHARA
ハーバード大学	Senior Fellow,
ケネディ・スクール	John F. Kennedy School of Government,
シニア・フェロー	Harvard University
連絡先	
Mailing address:	79 JFK St., M-RCBG, Cambridge, MA 02138
Office address:	124 Mt. Auburn, Cambridge, MA 02138
Tel:	+1-617-384-7430; Fax: +1-617-495-4948
Email:	Jun_Kurihara@ksg.harvard.edu; JunKuri@aol.com